

吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉吉野作造記念館（古川市福沼一丁目2番3号 TEL 23-7100）



惰眠をむさぼっている官僚や政治家を尻目に、労働者たちが新しい時代を見つめて立っている。さて混迷の現代、新しい時代を切り開くのは誰でしょうか。（小川治平画「黎明」『赤』1919年10月1日号）日本漫画資料館所蔵

吉野作造が「民本主義」を唱えてから八十年がたちました。発表した当時大きな注目と批判をあびた「民本主義」は、いままた見直されつつあります。

「民本主義」は「民主主義」を日本にもたらすための方便だけではありません。たしかに天皇が主権者であった当時、政治は国民が行うという考え方は危険思想となりました。そこで政治の主体を変えずに、政治の目的を国民のためとする「民本主義」を主張したことは、ある意味において民主主義を実質的に確立させるための戦略でした。

しかし、吉野の「民本主義」の源流をたどってみると、そこには東北出身ゆえの明治政府への批判意識やクリスチャンとして個人を大切にするという考え方があります。またそれは学生時代の親友たちの考え方と共通していました。

このように、「民本主義」は一時的な戦略を越えて、吉野の生活や人生を集約したものでありました。

そして、人間のだけれどもが神の子となる素質を持ち、無限に向上する可能性を秘めていると考え、激動の時代にあって弾圧にあいながら人間への信頼を持ち続け行動した勇氣は、現代の私たちに、何が大切かを改めて教えてくれます。

平成八年度第二回企画展

「民本主義」の八十年

三月九日(日)まで開催中

吉野が「民本主義」を主張して八十年。

「民本主義」、それは、本人の意向をこえて同時代に様々な問題を投げかけました。企画展Ⅱ「民本主義」の八十年Ⅱでは、「民本主義」を東北、キリスト教、選挙、社会現象など様々な側面からとらえ、その多様な意味合いと本質について考えています。

ブローグ

「民本主義」とは

1 「民本主義」の出発地

東北地方は、吉野が思想形成をした場であると同時に、大正デモクラシーの担い手を数多く輩出しています。それは、明治新政府で活躍の場がなかった東北地方出身者であるがゆえに、大正デモクラシーが主張されたという必然性もあつたと考えられます。ここでは、東北という地域と「民本主義」との関わりを、東北地方出身の人々を通して紹介します。

(1) 宮城県と民本主義

千葉卓三郎、内ヶ崎作三郎、小山東助、鈴木文治、栗原基、布施辰治

(2) デモクラシーの東北

滝田樗陰(秋田県)、阿部次郎(山形県)、新渡戸稲造(岩手県)原敬(岩手県)



2 「民本主義」と

キリスト教

Democracyの訳語である「民本主義」は、欧米で有力な宗教であったキリスト教の影響を深く受けています。自身がキリスト者でもあつた吉野と「民本主義」との関係を通じて、キリスト教から受けた思想的影響を考えます。

3 「民本主義」と

選挙

「民本主義」は実際の政治とどう関わったのでしょうか。吉野の主張と、内ヶ崎作三郎、小山東助など吉野と親しかつた政治家の言動から紹介します。

4 「民本主義」と

社会現象

新聞雑誌や漫画、歌などに表現された「民本主義」を通して民衆への浸透の具体的な様子を紹介します。

5 歴史の中の

「民本主義」

「民本主義」は歴史的な状況の産物という面が強かつたためか、激動する日本の現代史の中で評価自体影響を受け変化します。これまでの評価のありようと、将来のあるべき姿を展望します。

トピックス

今回の企画展では、新資料、めったに見られない、初公開などの貴重な資料を展示することが出来ました。それらをご紹介します。

◆今回初公開！◆

北澤楽天画『官員酒宴』

平野一郎氏所蔵

北澤楽天は、明治大正昭和の風刺漫画家。日本では初めてのカラー漫画雑誌『東京パック』を創刊するなど、先駆者として活躍しました。

楽天は、一九四四（昭和十九）年から四年間、田尻町に住んだことがあります。最初は疎開目的で遠い親戚を頼ってきたのですが、居心地がよかったためか戦争が終わっても二年以上滞在しました。

楽天の資料はほとんど、生地である埼玉県の大宮市立漫画会館に所蔵されていますが、田尻在住の方が古物商から買い求めたという新資料が発見されました。今回初公開です。「官員酒宴」は全長四メートル近くある巻き物で、官僚たちが酒宴で次第に醜態をさらしていく様子を描いた、風刺漫画ならではの題材です。



『官員酒宴』（一部）

◆これは面白い!?◆

宮武外骨『赤』

日本漫画資料館所蔵

「民本主義」がちまたの流行語となっていた一九一八（大正七）年、アウトサイダーのジャーナリスト宮武外骨が出した雑誌『赤』。この中で「民本主義」を使った漫画があります。官僚たちが様々な政策で「民本主義」の潮流を阻止しようとはしますが、民衆は困った顔で下を向いている、というもので、善良な一般民衆の戸惑いを通して「民本主義」の浸透の様子を表現しています。



『赤』

北澤楽天画

「デモクラおさん」

大宮市立漫画会館所蔵

「デモクラシー」の流行は家庭生活にも及びました。この漫画では、おさんという女中が「デモクラシー」を理由に怠けたり勝手な振る舞いをする様子を描いたもので、流行の意外な波及効果が風刺されています。

◆知らなかつた!◆

新渡戸稲造関係資料

盛岡市先人記念館所蔵

新渡戸稲造といえば、五千人札の顔。この人が吉野と関係することを知っていますか？

吉野は大学一年のとき、第一高等学校校長の新渡戸の講演を聴き感動し、「民本主義」の精神を学びました。

今回は、新渡戸の愛用したステッキや色紙、英文書簡などを展示しています。

新渡戸ってどういう人なのか、これを機会に知るのもよいでしょう。

◆東北人の原点!◆

原敬日記

原敬記念館所蔵

「白河以北一山百文」といえば、近代になって東北が受けた屈辱を象徴する言葉ですが、盛岡出身の原は、この言葉をペンネームとし、藩閥へ対抗意識を燃やしつつ政治家として功利的に活動し、一九一八（大正七）年首相になり、平民宰相として期待されました。

今回は、死後の公開を意図していたともいわれる日記の原本（複製）を展示しています。第一級の政治史料であるとともに、重要な文化財でもあるこの日記を、是非ご覧下さい。

◆めったに見られない!◆

阿部次郎日記及び

吉野作造書簡

大平千枝子氏所蔵

山形県出身で、大正デモクラシーの哲学的基礎である「人格主義」を主唱した阿部次郎の日記と、吉野作造が阿部にあてた書簡・ハガキ（全八通・うち三通展示）は、めったに見られない貴重な資料です。

特に書簡については、本来阿部の意思で「火中」に投ずるはずだったものを、ご遺族のご厚意によって公開することが出来ました。

吉野が阿部に満州への講演旅行を勧めたり、黎明会への入会の勧誘など、両者の交流を偲ぶことが出来ます。今回が最後の公開となるかもしれませんので、どうぞ早めに記念館へ！



『原敬日記』

吉野作造博士と 祖父順蔵

櫻井滋郎



(一)

祖父順蔵は、大正デモクラシーの旗手吉野作造を古川尋常小学校で教えたことがあると常々話していたという。

古川市は吉野作造の一一八回の誕生日に当る平成七年一月二十九日「吉野作造記念館」を古川市福沼に開館した。某日、記念館を訪ね、順蔵が古川小学校で教員をしていたことがあるのかについて調査を依頼した。

吉野博士が小学校二年生に編入学したのは明治十七年三月である。その当時の教員記録は校長のみの記載であるという。従って在職職員名は不明である。

近日、母が使っていた古い筆筒の底から、家業の蚕蟻の卵を

生み付けさせるために使う厚紙を表紙にした「櫻井順蔵履歴書」と書きした十頁ほどの書類が出てきた。その冒頭に「明治十七年二月十日、志田郡古川小学校授業助手を拝命。志田・玉造郡役所」とあり、次に「同十九年十月廿一日、依願免職」。更に「明治二十二年以降現今二至ルモ蚕種製造業ニ従事ス」と記載されている。そして履歴の最後に行に行くに従って字は乱れ「昭和六年十二月十三日から十六日まで東京に出張」と記入し書き終えている。

その間、蚕種業の勉強のため長野県上田高等蚕糸学校（明治三十九年四月七日から十三日）や東京高等学校（同年四月二十三日から二十七日）にて消毒法の研修を受けたこと。大崎地域

や宮城県の農業及び養蚕代表として全国各地へ出張した事項を詳述している。順蔵は、昭和八年十月一日に死去している。前述の昭和六年十二月の東京出張は公職として、最後の活動であったのであろう。

この記述から明治十七年、二十歳になっていた順蔵がどんな傳で古川尋常小学校の授業助手になったかは不明であるが、吉野博士が小学校へ入学する直前の二月には授業助手として勤務していたことは間違いないと考えられる。しかし、直接吉野博士を教えたかどうかは別にして二年八ヶ月同じ学校に居たことになる。

吉野博士は、「小学校の思い出」の文章の中で当時の学校のことを次のように記している。

「私は明治十七年に小学校に這入った。郷里は仙台市を去る北の方十一里、田舎の小都会ではあるが国道筋に当る比較的繁華な宿場で、所謂寒村僻邑ではない。それでもこの頃は文字を讀める者が案外少かったと見えて私の記憶では、學校は立ったが先生のなり手が無いといふのであったらう。人並に手紙でも書けさうなもののみな臨時に教鞭を取るべく狩り出されたもののやうに思ふ。私の借家に長屋住ひしてゐる駄菓子屋のおやぢ、場末で刻み煙草を製造して居る

老職工などが半日は学校の先生で半日は眞黒になつて働いて居たのを覚えてゐる。…中略…私は二年生に編入されたが、其頃から段々正式の教員を他郷から迎へ、初めて羽織袴で出勤することになつたやうだ。…後略…

戊辰の役の時、順蔵は満四歳であり、郷学有備館は六歳になつてからの入学の定めであることから、おそらく寺小屋で手習いを受けたものであろう。それは明治政府が小学校令を公布したのは明治五年であり、岩出山本郷小学校が開校したのは明治六年である。更に当時は小学校四年制であり、開校当時順蔵は十歳になつていたのでから推察される。

明治維新により俸禄を失つた武士の家にとつては苦しい生活であり、順蔵も働きながらの勉学だった様だ。その一例として明治十二年頃、鳴子温泉で働いていた事実がある。それは明治十二年六月六日付きにて、宮城県から「其方儀本月二日、鳴子村平民佐々木辰治二女美どり弟磯吉：中略：激流へ顛落シ溺死セントスルノ際直子二川中へ飛込救援候段殊勝之至依賞金壹円下賜候事」との賞状が残っている。

順蔵の父弥市は玉造郡大口村（現鳴子町）の出身であり、その縁で温泉町にかけ働きながら

勉強していたものであろう。その実績が那役所に認められ古川小学校授業助手を命ぜられたものであろう。

平成八年六月始め岩波書店から吉野作造選集第十四巻が刊行された。いち早く入手された吉野作造記念館研究員の田沢晴子氏から、選集の二七六頁に次の様な記述があり、櫻井順蔵氏は間違いなく吉野博士が古川小学校時代の先生であるとの連絡を受けた。

即ち、大正十一年十月六日金曜の日記に「…五日は朝のうち内で本を読む、やがて学校に行き明六雑誌やらしほ草の整理をやる。午後岩出山の人櫻井順蔵氏来訪、式拾何年振り也、明治十八九年頃の小學生時代の先生也、今は蚕糸業の傍玉造郡史を編纂しつゝありとか。…後略」

これで順蔵が吉野博士の小学校時代の教師であったことは証明された。しかし、吉野博士が思い出の中で書いている様な適当な先生だったかどうかは解らない。また文中にある玉造郡史を編纂しつゝありとの記述については、昭和四年発行の玉造郡誌の緒言の中で、「大正十三年七月廿二日櫻井順蔵君に郡誌の編纂を囑託せり、仍りて君は八月十五日より翌十四年一月二日に亘り、玉造軍団乃至合戦原踏査して罷む」と玉造郡教員会長須

藤規氏は書いている。

更に、東京で発行された雑誌「宮城県人」昭和三年発行通巻三九号に「玉造郡誌編纂委員調査日誌」として掲載した論文の冒頭に「…不才浅学にして能く斯る任務を完ふするを堪えざるものあり然れども晝夜兼行熱心事に当り実地に就き見聞し更に郡内諸彦の御援助を仰ぎ材料蒐集等に力盡さば或は職責の萬一を果すを得んか」と書き、後日の参考にと日記様式にて記述し現地の感想を和歌に託して挿入している。

従つて、吉野博士を訪問した頃は、正式に教育会からの委嘱は受けておらず、明治四十四年自费出版した「岩出山大観」の続編として、玉造郡全体のことを纏めたいという意欲があり、そのことを博士に話したのではないだろうか。その後郡教育会から実績を認められ正式に委嘱を受ける。しかし、結果的には前述の調査日記の内容部分を受持つて記述し、この作業は終わった。今、私の手元にこの時書いた郡全体の素稿約六十枚が残っている。

順蔵は晩年、若き日の追憶として朝暗い間に握り飯を背中に負い、三里（十二キロ）の道を歩いて古川小学校まで通った。そして、雨や雪の日は袴をたたみ、握り飯と一緒に背に負い着

物のすそを尻からげにして通つたものだと語つたという。

(二)

順蔵は蚕種業の傍ら前述の如く、郷土の故事来歴を調べ、古蹟から古瓦や陶片を集めるなど一応郷土史家として活動していた。その資料収集の習性は古文書から身近の人々の書翰に及んでいる。吉野博士関連の手紙も何通かが残っている。

これらの手紙は、博士本人に会つて戴いたものか或いは博士の知人を通じて手に入れたものか分からない。

吉野博士の二高の後輩であり、岩出山出身の宮本貞三郎氏（元青森県知事・晩年は岩出山町長の縁を利用したことも考えられる。宮本氏は吉野作造が旧制二高時代主催していた、仙台市北四番丁の自炊寮で同勢八人で生活していた吉野博士の友人である。

その時代の状況を「真山青果・青年時代の吉野君」の中で次の様に語っている。「…唯数人の同志相集つて共同生活をするという表面の建前であつたが、内実は吉野博士を中心として其精神的感化を受けようとする人々の集合であつた。…唯博士の図抜けて優秀なる頭脳と、友情に厚く上下の信望を一身に集

めて所謂稀れにみる模範生徒であつたという事は、期せずして他郡の者を糾合し、自炊生活を形成せしめたのである。こんなわけで予は中学の一二年を博士と同居していた。」

また、当時の博士の風貌を「身長五尺四五寸位細身のスラリとした顔の少し蒼黒いギョロリとして眼で風采のあまり揚がつた方ではなかつた」と書いている。宮本氏は東京帝大でも博士の後輩であり心の先輩として終生親しくしていた様だ。その事は吉野博士の日記の中に宮本氏との交流の様子が数多く出てい

ることでも分る。順蔵が持っていた手紙類は、いずれも明治三十七・八年頃の

東京大学法学部の諸先生方のものである。即ち穂積陳重。金井延。奥田義人。木場貞長氏と吉野博士のものである。吉野博士は明治三十六年穂積陳重教授の法理学演習に参加。三十七年七月政治学科を首席で卒業。大学院に入つてゐる。更に十二月には東京帝大工科大学非常勤講師になつた。一方雑誌「新人」の時評欄に執筆を始め、「国家学会雑誌」の編集にたざざわり河上肇を知る。この頃、主民主義を唱え始め、木下尚江、小山東助、大山郁夫、永井柳太郎と会合し社会主義を論じあう。
(さくらい・じろう 国會議員秘書・東京都在住)
(以下次号に続く)



吉野作造上京後の 転居ものがたり

②本郷区金助町

翌三十四年三月(二十四歳)たまの夫人と、前年生まれたばかりの長女信を呼び寄せて、本郷区金助町に移り住み、半年ぶりに親子水入らずの生活を楽しんでる。

③本郷区

駒込千駄木林町

明治三十八年十一月一日(二十八歳)の時点で、吉野家族は、本郷区駒込千駄木林町二一〇番地に住んでいる。このことは、『国家学会雑誌』二二五号のお知らせ欄の次の記事で明らかである。「玉稿ノ寄贈其ノ他編輯ニ関スル用向ハ左記ノ中へ」と記し、美濃部達吉と吉野の住所氏名をそれぞれ並べている。

吉野作造が、明治三十三年九月東京帝国大学法科大学政治学科に入学するために上京してから後、いつ頃どの辺に住んでいたのかその詳細について、なかなかつかめなかった。

当館が、昨年七月から始めた第一回・第二回(本年三月九日まで開催中)の企画展に必要な資料を収集する中で、副次的に発見した吉野の「住所」の変遷を、以下時間をおってたどってみよう。

①本郷区台町

大学に入学するために上京した吉野は、すでにその住人になっていた内ヶ崎作三郎・栗原基らに続いて、小山東助と一緒に、本郷台町の中央学生基督教青年会館に入った。

に導かれつつ」と壮行した。

ハイデルベルグの人となった吉野は、同九月二十五日、千駄木林町二一〇のたまの夫人宛に「目下起きて長い手紙を書き得る状態に在らず、但し心配に及ばず」と、ハガキを出している。

④本郷区東片町

四年後(三十六歳)、大正二年十一月発行の『新人』広告欄に、吉野は次の住所へ転居広告を出している。

本郷区東片町一四四番地

この時、長女信が十二歳、次女明が十歳、三女光子が七歳になっていたので、娘達の通学距離に配慮したためではないかと推察できる。吉野夫妻は、子ども達を名門「誠まことの小学校」に入れている。この小学校は西片町にあり、吉野の住まいのある東片町からは指呼の間にある。

⑤本郷区千駄木町

太田雅夫氏作成の吉野年譜の大正三年七月の記録に「この頃本郷区千駄木町の自宅周辺に、東大学生基督教青年会のメンバーが下宿し、吉野学校の観を呈す」とある。この記事と『六合雑誌』(キリスト教青年団体・東京青年会発行の総合雑誌)大正八年一月一日付の新年挨拶「謹賀新年」の記名欄に、吉野は住

所氏名を連ねている。それが左記住所でここ五・六年住む。

本郷区千駄木町五一
千駄木町五四番地が、東大学生基督教青年会・同主事藤田逸男氏の居所である。

⑥本郷区駒込神明町

さて、大正八年十月の日記から、二つ拾って次に示そう。

一〇月一日 水曜

夕方まで学士会に居る 中村君湯沢君来り家の事談判し結局六千円にて買ふ事にし金曜日書類取り換はず事にきめる。
一〇月一七日 金曜

朝学士会に赴き 中村湯沢二氏と落ち合ひ 家屋売買の書類を交換す

この「六千円也」の家が太田氏作成年譜にある「この年(大正九年)、駒込神明町に自宅を新築する。」(注1)と同じものか、多分同一のものである。この年吉野は四十三歳になっている。

ところで、たまたま、神明町の吉野の邸の向かい(神明町三二八番地)に住んでいた、秋田出身の鷲尾よし子氏が、大正十年春頃の吉野邸の様子を、詳しく観察し文章にしているのだから紹介する。(注2)

「吉野作造博士邸は南向きで横丁から北向きの大通りまで、坂上から坂下まで至る広大なお屋敷。表玄関は南横の坂上にあるが、ここはいつもメ切になっ

ていた。大通りと西側に通用門があり、そこから報道関係や家族の出入りがあった。わが家の向い側は木の高い塀と深い植込になっていて、二階から、令嬢達の華やかな笑い声や、時々クラシックの音楽が聞こえて来たりするだけで、一度も住んでいる方々をお見かけしたことはなかった。

近所とおつき合いもなければ、密接不可分なのである。(注1) 大正十一年二月二十四日付の日記帳に、吉野は「政府が気に入る不穩宣伝文書」の一例として、赤像社から吉野に発信された一枚のハガキを貼りつけている。その表書き住所が「神明町三二七」となっている。

(注2) 『明治から昭和まで』

(囑託 横山寛勝)



新資料紹介コーナー

吉野作造関係写真

(浅野拓郎氏寄贈)

吉野作造の両親、吉野の姉、末弟五郎、吉野家の内部など、寄贈された写真は古川の吉野家について貴重な情報を提供しています。高校時代の吉野作造や本郷教会のメンバーなど新発見を含む重要な写真です。



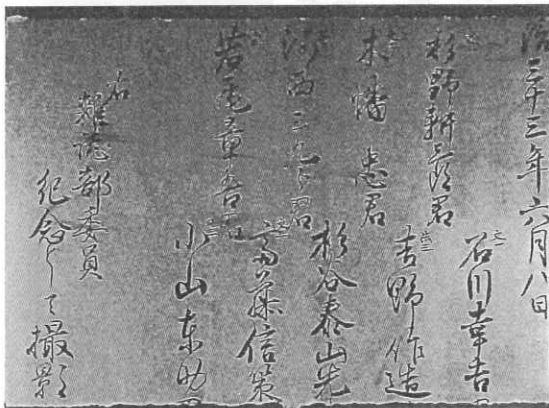
▶表

◀裏



▶表

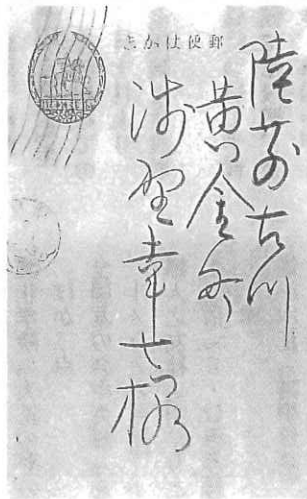
◀裏



浅野幸七あて吉野作造ハガキ

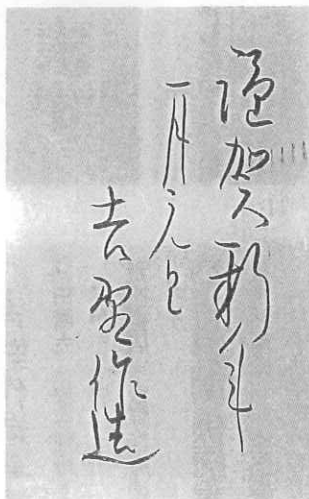
(浅野哲朗氏寄贈)

浅野幸七は吉野屋で働いたことがあり、作造の末弟五郎を養子として育てた関係もあります。古川と吉野の関わりを知る重要な史料です。



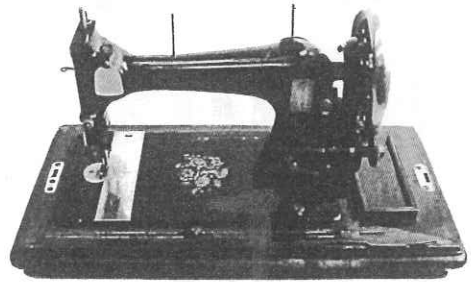
▶表

◀裏



たまの愛用ミシン

(吉野俊造氏寄贈)



吉野作造夫人たまの愛用していた卓上ミシン。ドイツ製。これで洋服を習っていたそうです。

小学校教科書

(佐藤恒夫氏寄贈)

明治三十七年前後の小学校教科書。日露戦争前後の政府の教育方針を知る格好の史料。



吉野作造記念館

こんな活用方法もあります

学校教育で吉野作造をどう生かすかは現在のところ模索段階です。今年度、熱心な先生が自発的に授業で吉野作造を取り上げ、大きな成果をあげましたのでご紹介しましょう。

なお、真山小学校児童の作品を記念館に展示しています。是非ご覧下さい。

◎仙台市立南小泉小学校

六年二組担任 菅原弘一先生

社会科「立ち上がる民衆」菅原先生は、全部で八時間かけて、児童たち自らが調べ、考え、まとめ、発表させることを通じて大正デモクラシーの時代への理解と共感を養う授業を展開されました。

まず身近な問題として米騒動を中心テーマとして、「米騒動が起きる前と後では人々のくらしはどのように変わっていったのだろうか」という大きな問いかけをしました。そして児童たちがグループで問題を作り、調べ、中間報告会をはさんで、最後に当時の人々へ手紙を書くという授業をされました。

そして、結果として新聞が作成され、手紙が書かれました。手紙からは、選挙や民主主義の大切さを知り、将来への思いをつづつたものが目立ちました。

◎岩出山町立真山小学校

六学年担任 佐々木朋男先生

佐々木先生は、社会・道徳・図画工作の三つの分野を総合的に学習するという画期的な試みの中で、吉野作造を教材として扱っています。

道徳では先生が吉野作造の生涯を読み物教材として六年生用に書き直したものを素材に、「不撓不屈を中心テーマとして理解したことプリントに記入させました。社会でもプリントを中心に、吉野作造の生涯、家族、民本主義について各自で調べて自由に構成して書かせ、図画工作では歴史人物ポスターの作成の中で吉野作造を取り上げています。

児童の中には休み時間を削って作成するという熱中ぶりだった子もあり、作造の信念や希望を学芸会や陸上大会に結び付けて理解していました。

◎宮城県古川高等学校

「倫理」「政治・経済」移動教室 鎌田・氏家先生

古川高校では、今回初めての試みとして、十二月十日より一年生八クラスが企画展と常設展を見学しました。

事前に吉野作造について学習したのち、記念館で常設展、企画展の解説を聞き、各自レポート作成に臨みました。

感想の中には、「今、汚れつつある政治に、彼の『民本主義』という考えを教えてやりたいと感じた」、「天皇主権絶対の中、『民本主義』を掲げ明治大正を駆け抜けた作造によって未来が作られている気がした」という現代に直結した問題関心を寄せる生徒や、「みずから『古川学人』と名乗った吉野」に「古川への思いを感じられました」と親近感を持った生徒もいました。

寄贈資料

◎吉野作造著書

武田壽夫『故吉野博士を語る』
ほか一四点
岩波書店『吉野作造選集』

◎吉野関係図書

日本共産党北部地区委員会
『日本共産党の七十年』
自由学園『自由学園の歴史』
ほか二点

文化学院『大正の夢の設計家』
ほか三点

全国友の会中央部『東北セツトルメントの記録』
婦人之友社『羽仁もと子著作集』
土浦信『S・D再考建築家土浦亀城』

佐々木正『講學餘談』
宮田光雄『現代日本の民主主義』
坂野潤治『近代日本の国家構想』
青沼常雄『新一家繁栄の道』
薩日内良則『画報近代百年史』
ほか二四八点

◎雑誌・紀要等

名古屋美術館『新博物館態勢』
賀川豊彦記念松沢資料館『雲の柱』

財佐々君治山報恩会『百年の歩み』

太田雅夫『吉野作造・変わりゆく我々の生活と思想』

佐々木力『UP10 一九九六年二八八号』

松山町教育委員会『宮澤賢治と阿部次郎試論』

◎その他の図書

佐藤恒夫『文部省著作尋常小學校本』ほか一六点

◎書簡類

浅野哲朗『浅野幸七宛吉野作造葉書』

◎写真

浅野拓郎『吉野作造関係写真』

◎遺品

吉野俊造『吉野たまの愛用のミシン』

◎その他

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『早稲田大学坪内博士記念演劇博物館』
東京大学法学部付属近代日本法政史料センター『明治新聞雑誌文庫』
法政大学図書館『藤井甚太郎文庫目録』

佐々木大知『志田郡会議事規則』
ほか十八点